

令和 5 年 6 月 17 日現在

機関番号：12401

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2017～2022

課題番号：17K00750

研究課題名（和文）リスク予防と自立支援を基軸とした子育て主体者の成長支援モデルの構築

研究課題名（英文）Study on growth support models for child-rearing people based on risk prevention and independence support

研究代表者

吉川 はる奈（Yoshikawa, Haruna）

埼玉大学・教育学部・教授

研究者番号：70272739

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,400,000円

研究成果の概要（和文）：我々は個々に合った子育て支援の方法について模索する中で、地域を中核とした支援方法を明示してきたが、地域内の連携のみの一律な支援、一時的な支援になりがちであり、リスク予防や主体者の自立など、支援に対する長期的視点が必要であるという課題が残った。子育て主体者の必要度に合わせ支援を行うために、予防や自立をキーワードに、子育ての成長ステージを可視化する必要があると考えた。そこで本研究では、長期的視点を持ち、誰も取り残されることがない持続可能な支援として、リスク予防と自立支援を基軸とした子育て主体者の成長支援モデルを構築することをめざして本研究を行った。

研究成果の学術的意義や社会的意義

国内の子育て支援においては、地域の実情に合わせて支援機関の量的充実や連携に加え、長期的視点で持続可能な支援モデルが必要である。従来の支援は一律で一時的な支援になりがちであることから、長期的な視点をもつ、子育て力の成長ステージモデルを可視化することをめざした。子育て力の成長ステージを明確化し、成長ステージに関連する事項を示すことで、先を見通し、リスク予防や自立への効果も期待できる。従来型の子育て力の成長モデルは地域内で一律に支援を行うが、成長ステージを可視化し、子育て力に合わせて支援することができる。また教育実践に汎用することで誰も取り残さない支援をめざすことができる。

研究成果の概要（英文）：In order to provide support tailored to the level of needs of child-rearing subjects, it is necessary to visualize a growth stage model of child-rearing ability. By clarifying the stages of growth in child-rearing ability, it is possible to look ahead, and it is expected to be effective in risk prevention and independence. While the conventional growth model of child-rearing ability provides uniform support within the region, the hypothetical model visualizes the growth stage, predicts the future, and can provide support according to the child-rearing ability. This research aims to construct a growth support model for child-rearing people based on risk prevention and independence support.

研究分野：生活科学

キーワード：子育て 生活 保育教育 支援モデル 地域

## 1. 研究開始当初の背景

少子高齢化がすすむ社会への対応は現代の日本が抱える喫緊の課題である。その中で、子育て中の家族が「地域で安心して生活できること」、「地域で子どもを育てること」はこれまで以上に求められている。このような状況を受けて地域力を高める子育て支援の取り組みは多くの地域ですすんでおり、支援の種類、量は増加したが、支援の質の充実は十分ではない。1つ1つの家族が抱える事情や子育てに対する考え方は異なることを考えれば、限られた、決まった支援の形ですべての家族が安心できる段階に到達することは困難である。

吉川は、学童期の子どもの放課後の生活実態について、2005～2007年度の3年間にわたり調査し、彼らの生活時間と遊びの特徴を報告してきた。そのなかで遊びの室内化と種類の減少、生活経験不足、遊び仲間の固定性、閉鎖性など危機的状況が明らかになった。また遊びを行う活動主体である身体の動きについても歪みやバランスの悪さが目立った。それらの課題を受け、生活動作の育成をめざした取り組みについては2009～2011年度にわたり実施し、現代の子どもたちの特性をふまえ、基本的な生活動作を身につけていくための大人の配慮や働きかけが必要であることがわかった。一方で2008年度の地域連携プロジェクトでは、乳幼児期の子どもとその母親を対象にした子育て支援研究から、子育て中の母親が子どもとの生活において、子育ての困難性に日常的に直面していることが明確になり、地域で母親を支援する方法が緊急の課題であることが示された。地域の弱体化が指摘される中で、子どもと家族を結びしくみづくりが求められるのをうけ、2011、2013年度および2014年～2016年度に子育ての地域支援の海外の先進事例としてフィンランドのチャイルド・ケアについてインタビュー調査を実施し分析を行った。国内の子育て支援には、地域での支援機関の量的充実と連携に加え、長期的視点で持続可能な支援モデルが必要と痛感した。さらに従来からの支援は一律で一時的な支援になりがちであることから、子育て主体者の必要度に合わせた支援を行うために、子育て力の成長ステージモデルを可視化することが求められていると考えた。

## 2. 研究の目的

我々は地域を中核とした支援方法を示してきたが、地域内の連携のみの限定的な支援、一時的な支援になりがちで、リスク予防や主体者の自立など、支援に対する短期的な視点だけでなく長期的視点が必要であるという課題が残った。子育て主体者の成長や必要度に合わせ支援を行うために、予防や自立をキーワードに、子育ての成長ステージを可視化する必要があると考えた。そこで本研究では、長期的視点をもち誰もが取り残されることがない持続可能な支援として、リスク予防と自立支援を基軸とした子育て主体者の成長支援モデルを構築することをめざした。

子育て力の成長ステージを明確化することで先を見通し、リスク予防や自立への効果も期待できると思われる。従来型子育て力の成長モデルは地域内で一律に支援を行うが、成長ステージを可視化し、先を見通し、子育て力に合わせて支援できるとした。本研究をとおして、リスク予防と自立支援を基軸とした子育て主体者の成長支援モデルを構築することをめざした。

## 3. 研究の方法

本研究は「リスク予防と自立支援を基軸にした子育て主体者の成長支援モデル」による効果について多角的に検討し、修正を加え、最終的に、子育て主体者に対する持続可能な成長支援モデルとして提案することを計画し、以下のような方法ですすめた。第1に国内、海外の研究動向をもとに、子育て支援でのリスク予防と自立の概念整理の実施。第2に国内・海外の子育て支援の先駆事例の検討、子育て支援者、子育て主体者へのインタビュー調査の実施。第3にリスク予防と自立支援に関する共通性や個別性を呈する因子や特徴を抽出し、子育て力のステージモデル案を作成。第4にアクションリサーチを行い、修正等を加え、子育て主体者に対する持続可能な成長支援モデルとして示す。これらを事例収集とインタビュー調査、質問紙調査に対して質的分析も含めながらすすめた。

## 4. 研究成果

### (1) 国内の子育て支援ニーズの状況

国内の支援ニーズを把握するために、国内の子育て支援拠点を中心に子育て支援者や子育て当事者の支援に対する認識について質問紙調査やインタビュー調査を行った(吉山・吉川ら2017、2018)。子育て支援者によれば、支援拠点は口コミから利用されることが多く、土日市外から、天気の悪い日の利用、室内の遊び場を求めてなどによく利用される。小さな子供を連れて安心して子育てを肯定してほしい、話をきいてほしい、切羽詰まった雰囲気、状況を居場所があることで安心感が得られることが求められると共通して回答する。

最初は情報を求める。顔見知り程度のつながりを求める。よければ、つながり、イベントに参加し、仲間がつけられる。一方で仲間関係を発展させることまで望まない。子どもの成長を共有して安心することで喜びとなり、支援者も含め成長を喜びあうことで、自分を取り戻す。周囲の

人に肯定されることで、自信がつく、自分の子育てを受け入れるのだという。これらの調査で昨今の支援ニーズの一部を捉えることができたが、育てる当事者が良好な対話を通して、成長し、つながりをもてる関係に加え安心できる居場所から自信を得ていくことの重要性が示唆された。

## (2) 海外支援事例

フィンランドの子育て支援政策は、誕生前から切れ目のない継続した支援で家族を支えていくことは知られているが、児童・生徒個々の特性に合わせ様々な機関が連携し、自立にむけて支援する特別支援における職業教育システムの事例を通して、良好な対話による継続的な支援の特性をみることができた(尾崎・吉川 2018)。またドイツミュンヘン市の保育政策には市の特性に合わせ、柔軟で子育て主体者優位の支援の模索をみることができた(Shuzui, Yoshikawa, 2019)。

## (3) 教育実践、支援実践への汎用

汎用例を ~ に分けて示した。

### 成長を記録し、共有する

成長過程で記録すること、記録を共有すること、いずれも支援の効果があり、また子どもの年齢によっても特徴が異なることが示された。例えば吉山・吉川(2018、2020)は教育実践での活用対象の1つとして母子健康手帳に着目し、長期にわたり継続して家族が共有する記録であり、その記録の特性や子育て当事者へに対して母子の健康管理以外にも大きな効果があること、母子健康手帳の特徴について整理し、教育現場への活用の可能性を探った。

また連絡帳を通した保育者と保護者の情報伝達の特徴(吉川ら 2021)では、育児不安の保護者にとって重要な支援を求める方法である連絡帳について検討した。その結果、保育者と保護者が毎日、子どもの育ちに関する情報をやり取りし、子どもの年齢により特徴が異なる点、共有する中で得られる効果など活用の有効性について示唆した。

具体的には低年齢児の連絡帳分析では、保育者の記述量が保護者より多く、そこには様々な原因がつかがわれた。保育者が保護者との信頼関係を築くため、観察した子どもの成長や保育中の楽しそうな姿などを積極的に保護者に伝えることで、保護者が嬉しく温かな意欲的な気持ちになるとのことだった。0歳児クラスの連絡帳を対象に、保護者と保育者の間のやりとりを分析し、連絡帳の役割を検討した他の研究でも同様な傾向がある。連絡帳は直接顔を合わせて行う対話に比べ、間接的であるが、連絡帳を「書く」「読む」行為は、子どもの気持ちや書き手自身のそのときの反応などについて振り返ることができる。また文字として蓄積された事実は、時間をかけてさらに考察を深めるための手がかりとして活用することがうかがわれ、保育者と保護者との対話、保護者への伝達方法の1つとして活用可能性を指摘した。

### 質の高い対話・声掛けを行う

教育、子育てのさまざまな場面で見ることができる対話だが、居心地のよさ、安心感を醸成するには良質な対話が欠かせない。保育カンファレンスの場面、絵本読みの場面で分析した。

質の高い対話を子育て支援においていかに実現させるか、についての手がかりをえるため保育者間のカンファレンス場面を通して分析した(吉川ら 2019)。保育者がもつ多くの経験と知恵を互いに出し合い、自分の保育を他者からみるとどのように見えるか、あるいは他者の保育をみて、自分の保育のイメージとのズレについて、再度考えていた。事前カンファレンスが巡回相談全体の中で、保育者による自発的な保育の再構築や保育の客観化などの支援機能をもつことが示唆され、質の高い対話の特性とその重要性を確認できた。

また絵本読みでの保育者と幼児の関わりの特徴 言葉かけを中心に(吉川ら 2022)では、絵本よみ場面という限られた場面であるが、幼児は話したいことを他者に話して満足という一方的な様子から、他者の話も聞く、うなずくという双方向のものに変化していく。3歳児の結果からは幼稚園での保育者の読み聞かせが家庭で読む絵本に大きく影響していた。

### 観察を活かし他者と関わる

観察を活かし他者と関わる凡例では、保育学習の教育実践を挙げる。大関・吉川(2019)は中学校家庭科における幼児の観察を用いた保育教育実践の検討を行った。触れ合い体験学習を行うより前に幼児の観察を用いた授業を行い、中学生が観察の中で何を学んだかを中心に考察した。観察を取り入れる意味として主体的な学習への意欲を高めること、経験の差を埋めることが期待できること、中学生の幼児の特徴の捉え方について新たな発見、広がりが示された。これらを通じて主体的に学ぶことが期待できるとともに事前、事後の授業でそれぞれの内容を生徒間で共有していくことの重要性が示唆された。

また保育学習の学びのプロセスとして、吉川ら(2020)は中学校家庭科保育学習を通じて、分析検討を行った。中学生は幼児の観察によって具体的な姿をイメージして遊びを行ったので、予想と異なる幼児の反応や行動に戸惑いが生じたが、特徴を詳しく捉え、全体として子どもに対して子どもの立場にたって、相手を個々で尊重する記録が目立った。このような教育実践から、幼児に関わる際、観察を行ってから観察を活かして関わることで、幼児の特性への理解が深まり、幼児の実態へのイメージがもてる結果となった。直接、良好な関わり方、声をかけることを目指すのは困難であっても、観察することを丁寧に取り入れたうえで関わることは、学びのプロセスとして重要であると考えられた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計9件（うち査読付論文 3件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 佐々木郁子、吉川はる奈	4. 巻 18
2. 論文標題 保育所の食事場面における保育者の子どもへの言葉かけの特徴に 関する研究	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 埼玉大学教育学部教育実践総合センター紀要	6. 最初と最後の頁 81-87
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 吉山怜花・吉川はる奈	4. 巻 71（3）
2. 論文標題 母子健康手帳における特徴を生かした教育現場での活用の可能性	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日本家政学会誌	6. 最初と最後の頁 155-162
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 尾田朱里・吉川はる奈	4. 巻 44
2. 論文標題 小学生の居場所感の特徴と変化	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 児童学研究	6. 最初と最後の頁 37-43
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 大関さわ子、吉川はる奈	4. 巻 17
2. 論文標題 中学校家庭科における幼児の観察を用いた保育教育実践の検討	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 埼玉大学教育学部教育実践総合センター紀要	6. 最初と最後の頁 71-76
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 吉川はる奈、大関さわ子、藤島香	4. 巻 18
2. 論文標題 中学校家庭科保育学習における学びのプロセスの検討幼稚園で幼児の観察とふれあい学習を行う授業を中心に	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 埼玉大学教育学部教育実践総合センター紀要	6. 最初と最後の頁 101-108
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 吉山怜花、吉川はる奈、諸山美咲	4. 巻 67(2)
2. 論文標題 子育て支援拠点を利用する子育て当事者の支援ニーズの特徴	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 埼玉大学紀要	6. 最初と最後の頁 211-220
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 吉川はる奈、伊藤葉子、倉持清美、叶内茜、鎌野育代	4. 巻 67(1)
2. 論文標題 家庭科教員養成における家庭看護の教材開発 教材の特徴と学習の実際	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 埼玉大学紀要	6. 最初と最後の頁 115-122
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 吉川はる奈	4. 巻 1
2. 論文標題 地域における保育とESD	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 持続可能な社会をつくる日本の保育－乳幼児期のESD	6. 最初と最後の頁 46 55
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Haruna YOSHIKAWA, Kaori Shuzui, Reika YOSHIYAMA	4. 巻 19
2. 論文標題 The perspective of community child-rearing in Japan; Analysis of the interview for child-care nurse.	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 19th Biennial International Congress	6. 最初と最後の頁 64-64
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計13件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 3件)

1. 発表者名 吉山怜花、吉川はる奈、奥隅成美
2. 発表標題 オンラインを活用した保育体験学習の授業実践の試み
3. 学会等名 第73回日本家政学会大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 吉川はる奈、胡丹、安東英里佳
2. 発表標題 保育所連絡帳を通じた保育者と保護者の情報伝達の特徴
3. 学会等名 第73回日本家政学会大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 吉川はる奈、寺園さおり
2. 発表標題 保育巡回相談におけるカンファレンスにおける支援機能
3. 学会等名 日本発達心理学会第31回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 藤島衿香、吉川はる奈、吉山怜花、安東英里佳、大関さわ子
2. 発表標題 中学校「ふれあい体験学習」での学びー遊びの違いによる検討
3. 学会等名 第72回日本家政学会大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 吉川はる奈、寺園さおり
2. 発表標題 地域との連携による保育巡回相談のとりくみの実際その2
3. 学会等名 第73回日本保育学会大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Haruna Yoshikawa, Reika Yoshiyama
2. 発表標題 Use of Maternal and Child Health Handbooks in child care classes for high school students
3. 学会等名 ARAHE2019, 杭州 (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Haruna Yoshikawa, Shuzui Kaori
2. 発表標題 What do you learn through the experience of junior high school students playing with infants in childcare?
3. 学会等名 OMEP2019, Kyoto (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 吉川はる奈、寺園さおり
2. 発表標題 地域との連携による保育巡回相談のとりくみの実際
3. 学会等名 日本保育学会第72回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Shuzui Kaori, Haruna Yoshikawa
2. 発表標題 Relationship between Childcare takers and Parents learning from childcare in Germany.
3. 学会等名 OMEP2019, Kyoto (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 吉山怜花、吉川はる奈
2. 発表標題 母子健康手帳高校家庭科における保育学習教材の検討 母子健康手帳の活用の可能性
3. 学会等名 日本家政学会第70回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 吉川はる奈、寺園さおり、吉山怜花
2. 発表標題 保育巡回相談における事前カンファレンスの支援機能
3. 学会等名 日本発達心理学会第29回大会
4. 発表年 2018年



1. 発表者名 尾崎啓子、吉川はる奈
2. 発表標題 フィンランドにおける社会性を育てる特別支援教育：JOP0（ヨポ）プログラムの教育効果
3. 学会等名 特殊教育学会第56回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 吉山怜花・吉川はる奈
2. 発表標題 転居者の多い地域における子育て支援の特徴
3. 学会等名 日本家政学会第69回大会
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	守隨 香  (Shuzui Kaori)  (40770780)	共立女子大学・家政学部・教授   (32608)	
研究分担者	尾崎 啓子  (Ozaki Keiko)  (80375592)	日本女子大学・家政学部・教授   (32670)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------